

## 乳牛の息遣いに思いを寄せて

宮崎県立都城農業高等学校 畜産科 3年 濱田 翔馬

搾乳を待つウシたちは、白い息を吐き大きな乳房を左右にわずかばかり揺らしながら父が牛舎に来るのを静かに待っています。父は、外がまだ暗く、静寂に囲まれた早朝5時に牛舎に向かいます。暗かった牛舎に明かりがともり、搾乳準備が始まります。

搾乳機器のスイッチが入りコンプレッサーの音が力強く鳴り響き始めると、ウシたちは大きな目をゆっくりと動かし父の姿を追いながら自分の搾乳の順番が来るのを静かに待ちます。

ようやく、最初のウシの乳房にミルカーがセットされると、さっきまでウシの体内にとどめられていた暖かで純白のミルクがいきおいよくパイプライを走り始めます。カッチャンカッチャン。一定の間隔にあわせてリズムカルに乳が搾られていきます。乳房には、はち切れんばかりのお乳が蓄えられており、搾乳前の大きな乳房はウシにとってはとても痛く、負担がかかる時間もあります。

このように我が家の一便是ウシと共に始まります。我が家は、高千穂峰の麓都城市山田町にあり、父の他、祖父母、叔父の5人で搾乳牛80頭飼料畑15haの経営をおこなう酪農専業農家です。

そんな我が家長男として生まれた自分は、ウシと共に生活に魅力を感じるようになり、高校進学を間近にした中3の時に「俺は、酪農家になる」と心に決め都城農業高校の畜産科に進学しました。学校から3.5km離れたところに三股牧場があり、肉用牛・酪農・養豚・養鶏・愛玩動物と飼料畑からなる牧場です。実践的な実習を通して学習を深めています。畜産が好きな仲間と学ぶ時間はとても楽しく充実した毎日です。

学校のない休日には、牛舎に入り搾乳や飼養管理の手伝いをします。1つめは、少しでも多くの時間をウシと関わってみたいということ。2つめは、休日のない酪農経営で父や祖父母に少しでもゆっくりして欲しいと言うこと。3つめは、飼養管理作業以外の作業時間を探して確保することができるからです。

父は言います。「一頭一頭の行動の特性を知ることが、病気などいつもの違いを的確に見つけ出すことにつながり、より早く対応することで経営にとってもウシにとっても無駄がなくなる。」そして、「そのためには、立ち方、歩き方、呼吸の様子、目の視線など、五感を最大に使ってウシを見ることが大切だ。」と話してくれました。そして、「ウシは自分がして欲しいことを口に出すことはない。人が見て理解する事が大切だ。酪農は毎日の搾乳や飼養管理を通してウシのことが分からぬようでは、酪農経営は難しいのかもしれない。」

父の四半世紀にわたる酪農人生から発せられる言葉は重いものです。自分も父のように

ウシをしっかりと見る力が身につくのだろうか。そういえば、酪農の盛んな都城でも酪農家数は減少しており、高度な技術を身につけることが困難化しているからではないか、とも考えるようになりました。

また、酪農経営はウシの飼養管理にとどまりません。飼料作物の作付けや、農業機械・器具の操作・メンテナンスと、経営に必要なスキルは多岐にわたります。志だけでできる仕事ではないことに改めて愕然としました。

そんな時、酪農担当の先生から学校で導入が進んでいるAIを駆使した農場管理ソフトの活用とロボットトラクターについて説明がありました。この管理ソフトは、ウシの動作を通信回線でリアルタイムにデータを収集し、個体の特徴的な動きと、全国で飼育されているウシのデータベースから、発情や病気などの情報を解析によって提供してくれます。

また、飼料畑で使用するロボットトラクターは、無人で耕耘作業ができる全自動トラクターです。運転の様子を監視する必要はありますが、空いたタスクを有効に活用することができるようになりました。

また、先生は「AIがあるからといって、飼育技術や家畜の観察が不要になると言うことではない。」「さまざまな、管理上の事象の見立てをより客観的な情報として共有・活用することで、組織的に組む際に強力なツールになる」と話されていました。私もそのように考えるようになりました。飼育の基本を習得し、発情の様子や、体調を崩したウシの様子を理解した上で、対処法や回復過程を知っておかなければ、現在ウシがどのような状況にあるのかを理解することが出来ません。

現在私は、日々のウシの管理作業を通して観察されるウシの様子と、端末から送られてくるウシの情報を比べ、AIの能力と活用について見識を深めています。

酪農は、日々の搾乳を通して新鮮で栄養豊富な牛乳を消費者のみなさんに供給しています。これら牛乳は、農家のみなさん日々の管理とウシの気遣いを感じながらウシと共に生み出す営みです。原材料を入れれば出てくる工業製品とも違います。私たちウシを育てる一人ひとりの思いがあつてこそだと思います。現在は、飽食の時代と言われ様々な農産物や加工品を容易に手に入れることができます。しかし、いのちを育みいのちを通して私たちのいのちが支える営み、この象徴とも言えるのが酪農だと考えます。

酪農は、人類が畜産の営みを始めてからずっとウシと人がともに歩んできた歴史でもあります。日々ウシの息遣いに耳を傾けそれに相応して答えていく。一日一日たゆまなく繰り返す営みです。みなさんにもこのことを知っていただきウシからいただく乳に思いを一つにできたらと考えています。

本校でも、酪農教育ファームの認定を受け、地域の子供たちに酪農の魅力を伝える取り組みも行っています。いのちの恵みをいただきウシに感謝し大切にミルクを頂く。きっとその

---

ようにウシに対する尊敬の念といとおしさを忘れてはいけないと考えます。

また、今日も学校から帰ると牛舎のコンプレッサーの音がこだまし始めます。いつもと変わらない搾乳作業が始まります。そうだ、乳房炎にかかっていたあのウシの炎症は治まったかなあ。初産でやや落ち着きのなかったウシはどうかなあ。分娩間近のウシはどんなかなあ。自宅へ帰る道のりもウシの仕草が思い出されます。

高校卒業後は、宮崎県立農業大学校に進学し、畜産についての知識を習得し、酪農経営に参画し、立派な酪農の担い手になる。この目標に向かって頑張っていきたいと考えています。